

イベント
レポート

テクノロジーで社会の課題を解決する

**CTC FORUM
2022**

SXへの挑戦

技術と技(わざ)を未来のために





「CTC Forum 2022」 SXをテーマにリアル×オンラインのハイブリッドで開催

CTCは2022年11月8日、「CTC Forum 2022 Live」を東京・セルリアンタワー東急ホテルと大阪・ホテル阪急インターナショナルの2拠点で同時開催しました。なお、CTC Forumの開催は実に3年ぶりとなります。

今年のテーマは、「SX への挑戦 技術と技（わざ）を未来のために」と題し、持続可能性を高める経営の変革に焦点を当て、デジタルテクノロジーを活用したさまざまな取り組みをお客様にお届けしました。

リアル開催のCTC Forum 2022 Liveでは、お客様による事例講演のほか、CTCやパートナー企業様による講演・展示を通して、お客様が抱えるビジネスやシステムに関する課題の解決策を提示することで、ビジネス成長の“気づき”を発見できる場となりました。

基調講演ではCTC社長の柘植による「俯瞰とSX」を始め

として、ANAホールディングス様から「DXで実現する社会とANAグループの未来」、トヨタ自動車様から「お客さま、従業員の幸せの量産 トヨタ自動車DXの覚悟」をタイトルに、DXの現在地とSXを見据えたビジョンについてお話しいただきました。

オンラインで実施したCTC Forum 2022 Connectでは、オンデマンド講演のご視聴に加えて、仮想空間内の展示ブースを回遊し交流いただきました。

CTC Forum 2022では、Liveスポンサー、Movieスポンサー、Connectスポンサー合わせて総勢52社のパートナー企業様にご協賛をいただきました。CTC Forum 2022 Liveでは30の講演、展示会場ではCTCグループを含め東京で33ブース、大阪で5ブースを出展。CTC Forum 2022 Connectでは、70の講演と66の展示コンテンツが出展されました。



柘植 一郎



時間的、地理的にビジネスを俯瞰し、 長期的な視点でSXに挑戦する

本日は「CTC Forum 2022」にご参加いただきまして誠にありがとうございます。コロナ禍を経て3年ぶりに開催できたこと、まさに感無量の一言です。今年度のCTC Forumは、新たな試みとして、リアルとオンラインのハイブリッドで開催しています。本イベントの開催に先立ち、CTCを代表してご挨拶させていただきます。

今回のテーマは「SX への挑戦 技術と技（わざ）を未来のために」です。持続可能性を高める経営への変革を目指すSX（サステナビリティトランスフォーメーション）に必要な「俯瞰」についてお話しさせていただければと思います。今年、CTCは創立50周年を迎えました。お客様とともに歩んできた50年を振り返り、次の50年もお客様や社会からの期待に応えるためにさまざまな取り組みに挑戦して参ります。そのひ

とつとして、地球環境を取り巻くさまざまなデータに基づいて、現在の地球の様子や過去からの変化、さらには将来をシミュレーションできるデジタル地球儀「SPHERE（スフィア）」を神谷町オフィスに導入しました。スフィアは地理的な俯瞰だけでなく、遠い過去から未来まで時間的な俯瞰もできるため、SXを考えるときに大いに役立ちます。

一昔前までは、「良い会社＝儲かっている会社」という価値観もありましたが、企業の事業継続性やコンプライアンスなども含めて評価されるようになり、「良い会社でなければ儲からない」という世の中になりつつあります。その中で現在、企業の評価軸は大きく3つに分類できると考えています。

1つ目は、財務的側面。2つ目は、「パーパス経営」という言葉に代表される企業理念などの独自のガバナンス。3つ目は、

気候変動対応など世界標準にどれだけ合わせられるかです。これらは近年、特に注目されている分野であり、SXにもつながる部分です。財務的な側面だけでなく、非財務的な側面が企業価値を測る指標となった今、企業としてどのように取り組むかが課題となっています。逆に考えると、労働基準や環境基準を守らなければ新たに人を採用することも難しくなりますし、消費者や取引先から選ばれなくなっていくリスクもあります。

そうした意味でも、短期的ではなく、長期的な視点でビジネスを俯瞰して見るのが重要であり、ITを効率的に活用しながらSXを推進することは今後さらに求められていくでしょう。一方、我々CTCだけで達成できることには限界があります。ぜひ皆さまとともに正しい「デジタル道」を歩み、人と地球のために貢献していきたいと考えています。



持続可能な未来に向けたDXへの挑戦 社会に寄り添う事業展開でグローバルビジネスを牽引 ANA & トヨタが語る「SXを見据えたデジタルビジョン」



ANAホールディングス株式会社
執行役員 グループCIO
全日本空輸株式会社 執行役員 デジタル変革室長

荒牧 秀知氏



トヨタ自動車株式会社
情報システム本部 CPL (Chief Project Leader)

岡村 達也氏

オープニングでは、ANAの荒牧氏、トヨタの岡村氏をゲストに招き、基調講演が行われました。

まずは、「DXで実現する社会とANAグループの未来」をテーマに、荒牧氏が登壇。ANAが推進するDXへの取り組みを、「従業員体験価値 (EX)」「お客様体験価値 (CX)」「企業の持続性とESGを両立したSX」の3つの視点から紹介しました。

「EXを高めることがCXにつながる」と考えるANAでは、従業員がスマートに働ける環境を整えることに注力しています。例えば、これまで1人1台持ち歩いていた無線機をウェアラブルデバイスにリプレースすることで、お客様対応品質の向上と社員同士のコミュニケーションの改善に取り組んでいます。

CX向上では、旅客系、運航系、お客様情報などシステムごとにサイロ化していたデータを仮想的に統合・連携するCX基盤を構築。集約されたデータを活用して、パーソナライズされたサービスを適切なタイミングで提供する取り組みを進めています。具体的には、お客様に搭乗便が満席であることを事前に通知するサービスを提供するなど、よりストレスなくスムーズな搭乗を実現する構想が語られました。

SXでは、持続可能な社会の実現と企業価値向上を目指す「ANA Future Promise」を紹介。「運航におけるCO2排出量を削減」「資源類の廃棄率をゼロに」「食品廃棄率を50%削減」など、2050年を見据えた中長期のESG目標を達成すべく、SAF (持続可能な航空燃料) の活用、航空機の技術革新、環境配慮型素材の活用を検討しています。今後も時代の動きに合わせて、人的サービスとデジタルテクノロジーを組み合わせ、サービス変革にチャレンジしていきたいと荒牧氏は語ります。

続いてトヨタの岡村氏が、「お客さま、従業員の幸せの量産」をテーマにした講演を行いました。

前半では、未来のトヨタに向けた活動を紹介。トヨタでは、Carカンパニーからモビリティカンパニーへ転換することを目指し、2024年 第1期オープンに向けてウーブンシティ構想を進めています。「幸せの量産」をパーパスに、そして「モビリティの拡張」をビジョンに、街全体をテストコースに見立てて未来の当たり前を発明し、富士山の裾野から世界に新たな価値を届けていく決意が語られました。

次に紹介されたのが、ウーブン・プラネット・ホールディングスが開発を進めている車載ソフトの開発基盤「Arene (アリーン)」です。従来は、自動車メーカーや一部のサプライヤーしか開発できなかった車載ソフトを誰もが開発できるオープンな環境にすることで、車の可能性を広げていくという展望が説明されました。

後半では、トヨタのDXの現状が語られました。「3年間で『デジタル化』を世界トップレベルに」という目標を実現すべく、社内公募で選ばれたデジタルネイティブ人材を中心にデジタル変革推進室を発足。特に「デジタル化になじみず困っている人の支援」と「デジタルネイティブを後押しする活動」に取り組み、デジタル対応力の底上げに注力しています。デジタルツールの基本的な使い方など、初歩的な研修を通してデジタル化に関する悩みを解決し、社内全体のデジタル知識の向上を図るとともに、より新しい知識・スキルを身に付けたい社員には業務の一環として学べる環境を提供しています。

最後に岡村氏は、「同じ課題を持つ皆さまと協調することでDXを進めていき、ともに日本の産業を元気にしていきたいと思っています」と話し、基調講演を締めくくりました。

竹村 眞一氏

グローバル規模の社会課題に真摯に向き合い あらゆる生命との共創で「地球OS」をアップデート

地球の未来を変える千載一遇のターニングポイントで企業が起こすべき行動は？

特別講演では、京都芸術大学教授の竹村 眞一氏が登壇。「地球目線未来をデザインする～『共創地球学』への招待～」と題し、地球環境問題や気候変動などの課題を紹介したうえで、解決への方向性を示しました。

冒頭では、竹村氏が独自に開発したデジタル地球儀「SPHERE（スフィア）」のマップ上に気象や人口動態といったデータを重ね合わせてリアルタイムに可視化し、地球規模で現在どのような問題が生じているのかを解説しました。二酸化炭素濃度や気温が変化する様子を指し示すとともに、水不足や森林火災、その延長線上に起きている食料不足や紛争など、今や人類は地球の未来を左右する大きな要因になっており、早急な改善活動が必要だと、竹村氏は訴えます。これら諸問題を解決し、平和の再構築を実現するためにはSXが必須で、人類が「地球の体調」といかに向き合っていくかが今後問われていきます。

「これからの消費行動を変えるかどうかで、地球の未来は大きく変わります。地球環境問題は、もはや誰一人として無視できない命題なのです。科学に基づいたデータを可視化することは、DXとSXを共存させるうえでとても重要になります」と竹村氏は強調します。

このように人類は地球環境問題を引き起こす存在ではありますが、それと同時に地球に対してポジティブな影響を与えられる存在でもであると示唆しています。ここで重要なのは、未来を変えるために取り組むテーマが「現状維持」では不十分だということです。

「サステナビリティ」は、「持続可能性」

と訳されますが、現状の人類活動を維持しようとしても希望は見えてきません。むしろ悪化の未来をたどる一方です。竹村氏は、「サステナビリティの考え方を一度リセットし、概念自体をアップグレードさせる必要があります」と強調します。具体的には、電気自動車や再生可能エネルギーを普及させるだけでなく、5つのD（自由化、脱炭素化、分散化、デジタル化、人口減少）に向けて異業種間で連携し、電力、水道、ガスといった公共インフラを変革していく「Utility3.0」を目指していく必要があります。そのキーワードとして「DAO（分散型自律組織）」が挙げられます。ブロックチェーンや仮想通貨の文脈で語られるDAOの思想は、リスク分散の観点からエネルギー分野にも応用できます。

再生可能エネルギーの導入は、一昔前なら経済的な余裕がない途上国では困難だと考えられていました。しかし、昨今では小規模融資の浸透も後押しとなり、初期投資後のコストがかからず安定的に電力を得られる太陽光パネルでの自家発電が普及してきました。

また、中長期的には日本でも電力会社の役割が変わり、電気を生産するのではなく、各家庭で発電された電力を融通し、最適化するコーディネーター、いわゆる「電気を作らない電力会社」も登場するだろうと竹村氏は予見しています。

水については、水洗トイレやシャワーに代表されるように、現状では大量の水をいたずらに消費するばかりですが、必要最低限の水で現在の利便性を再現できるような技術が開発されて普及していけば、水ストレスの緩和が期待できますし、

中央集権型の巨大インフラが整備できない地域での水不足を解決する手段になり得ます。

続いて竹村氏は、エネルギーの効率性にも言及します。例えば、現在使われている20c型のガソリン車の場合、投入エネルギー（ガソリン）の80～90%がエンジンの排熱やタイヤの摩擦で失われてしまいます。人間の何十倍も重い車体を動かすのに、ほとんどのエネルギーが使われていることから、「人の移動」「荷物の輸送」という目的で使われているのは1%程度で、99%はムダと言えます。しかし、ポジティブに捉えると「99%のムダ＝伸びしろ」であり、イノベーションによって変えていける領域だと、竹村氏は強調します。

普段、何気なく使っている車やトイレといった20世紀の発明は、いずれも人類のイノベーションがもたらした産物ですが、地球環境を考慮するとまだまだ改善の余地があります。人類社会のOS更新を通じて地球のOSを更新する、つまり「人新世」を歩むメインアクターは企業であるため、これからの企業は地球環境を念頭に置いた行動が求められます。

最後に竹村氏は、「現在、地球の未来を変える分岐点に立っていることに多くの方が気付いていないでしょう。このチャンスを逃すと、未来の世代が地球に住めなくなってしまいます。このような事態を防ぐためにも、地球との創造的なパートナーシップをデザインし、人類以外の微生物も含めたあらゆる生命と共生しながら共創してゆく地球学が本当に必要なのです」と語り、講演を締めくくりました。

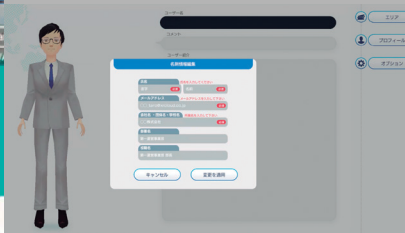




テクノロジーで社会の課題を解決する

CTC FORUM 2022





70のオンデマンド講演、仮想空間に設けられた66の展示ブース CTC Forum 2022 Connect

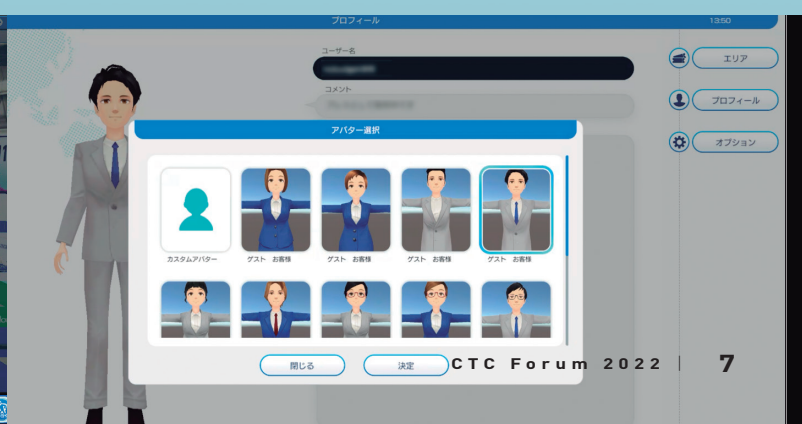
新型コロナウイルスの影響により3年ぶりの開催となったCTC Forum 2022は、東京・大阪会場で「CTC Forum Live」が行われ、オンラインで「CTC Forum Connect」が開催されました。このうち「Connect」では、70の講演がオンラインシアター形式にて公開、66の展示ブースがメタバースによる仮想空間に設けられ、多くの来場者にビジネス課題の解決の糸口が届けられました。

Connectの仮想空間に構築されたCTCおよびパートナー企業の展示ブースには、さまざまなソリューションの説明動画や画像、PDFなどが掲示されました。展示会場に訪れた来場者の中には、仮想空間における自分自身の分身となる「アバター」を操りながら会場内を探索する方や、同じアバターに扮した説明員と音声・

ビデオ、チャット、モーションによるボディランゲージを通して会話を交わす方、アバターを介して名刺を交換する方などが見受けられました。また、同じ職場の複数の方が1台のオフィスPCを囲み、1体の共有アバターを操りつつ仮想空間内を歩き回り、入れ代わり立ち代わりでメタバースの発展や活用について、質問をされるシーンは印象的でした。

Connect展示をきっかけに、初めてメタバースを体験したという来場者からは「出張することなく、有識者と対話できたことが有益であった」といったお声が寄せられました。

多くの来場者で賑わう仮想空間の光景は、まさにメタバース時代における展示会を彷彿とさせるものでした。



CTC Forum 2022 スポンサー



伊藤忠テクノソリューションズ株式会社

〒105-6950 東京都港区虎ノ門4-1-1 神谷町トラストタワー TEL 03-6403-6000(代)

<https://www.ctc-g.co.jp/>

CTC FORUM 2023 2023年秋開催予定

皆さまのご来場をお待ちしております。